□大規模災害と災害ボランティア
新しい社会に向けて

大阪大学　渥　美　公　秀

阪神・淡路大震災から20年目となった。現在では、災害が発生すると、災害ボランティアが駆けつけ、救援活動を展開する姿が見られるようになった。また、災害ボランティアは、緊急時の一時的な活動に留まらず、長期的な復興過程にも参加するようになった。さらに、次なる災害に備えて、各地で平常時にも活動するようになってきた。そして、各地に散らばる災害NPOや全国の社会福祉協議会、および、その関連組織などは、こうした災害ボランティアの動きを支える役割を担っている。

もちろん、災害ボランティアを巡る様々な問題も露呈している。例えば、マニュアルに縛られてしまったために、東日本大震災の被災地へ向かう災害ボランティアの間で、自粛モードが広がったこともその１つである。マニュアルには、「現地の災害ボランティアセンターでコーディネートしてもらって活動する」と書かれていたが、あのような大規模災害では、現地の人々が迅速に災害ボランティアセンターを立ち上げることは困難であった。災害ボランティアセンターがまだ開設されていないから現地へ行かないというわけである。被災地には、助けを求める被災者が大勢いたにもかかわらず……災害ボランティアは、こうした問題に直面しては、それらを少しずつ解決し、より被災者本位の活動へと変化しつつあるというのが現状であろう。

そこで、本稿では、災害ボランティアが定着していく日本社会について、今後の大規模災害と災害ボランティアについて考察してみたい。それは、災害ボランティア元年と呼ばれた阪神・淡路大震災から、約20年もの月日を経たからこそ見いだすことのできる希望でもある。まず、東日本大震災を経た時点での災害ボランティアの現状を簡単に整理する（第１節）。続いて、目標となる社会を描く（第２節）。そして、そこへと至る潜在力を秘めている事例を紹介し（第３節）、その含意を述べる（第４節）。

１　災害ボランティアの現状

災害ボランティア元年と呼ばれた阪神・淡路大震災の頃、災害ボランティアを取り巻いていた風景と、東日本大震災を経たことで見えてきた風景には、決定的に違う点がある。それは、阪神・淡路大震災の前には、災害ボランティア活動を体験したり、目の当たりに見たりした人々の数は圧倒的に少なかった。しかし、その後の中越地震や中越沖地震などを経て、東日本大震災に至るまでには、多くの人々が災害ボランティア活動に参加した経験をもち、それを語り、また、災害ボランティア活動を目の当たりにしたことのある被災地が、日本に点在していた。

このことを理解した上で、災害ボランティアが、現在の閉塞感に満ちた社会を変革してくれる可能性はないだろうか？まず、次節では、変革の先に

描かれる風景を先取りしておく。

2　災害ボランティアが導く新しい社会

災害ボランティアは、「災害時の救援過程、復興過程、地域の防災過程などにおいて、既存の秩序にとらわれることなく、人々が無条件に助け合い、互いの求める事柄について臨機応変に取り組むような社会」へと導いてくれると考えたい。具体的には、災害ボランティアは、相手を問わず、見返りを求めずに、臨機応変に、活動を展開している。それは、被災者から見れば、見知らぬ人から支えてもらう事態である。そのやりとりには、多分に情緒的な結びつきが伴っており、災害ボランティアも、被災者も、活動すること自体が歓びである。

実は、こんな風景は、災害直後の一瞬見られはする。東日本大震災の直前に翻訳がでた「災害ユートピア」（ソルニット著、亜紀書房）は、そうした相互扶助の世界を実例とともに挙げているし、わが国の古典「方丈記」にも人々が助け合う姿が描かれている。しかし、両者ともに、そのような助け合いに満ちた事態は、長くは続かず、うたかたのごとく消えてしまうことをも指摘している（泡沫性）。また、そうした相互扶助は、被災地では起こるが、他の地域ではなかなか起こらない（局所性）。となれば、泡沫性と局所性を克服していくことが、新しい社会への現時点での課題となる。

3　新しい社会へのルート―事例「被災地のリレー」

ここでは、泡沫性と局所性を克服しうる事例を紹介する。筆者が理事長を務める兵庫県西宮市にある災害NPO（日本災害救援ボランティアネットワーク：NVNAD）は、岩手県野田村で、弘前、八戸、および、関西の災害ボランティア・NPOのゆるやかなネットワーク組織「チーム北リアス」を結成して、救援および復興支援活動を展開している。また、同時に、2007年中越沖地震の被災地である新潟県刈羽村に、救援活動を展開したご縁で、現在も交流が続いており、福島から刈羽村に避難してこられた方々を間接的に支援してきた。筆者には、刈羽の人々から「東北の被災地での活動を模索している」という声が聞こえてくることが頻繁にあった。福島からの避難者に対する支援と同時に東北でも支援を展開したいというわけである。そこで、刈羽村の皆さんに、野田村での活動を紹介し、刈羽から野田村への支援がありうることを伝えた。

朝の気温がマイナス７度を記録した2011年12月10日、岩手県野田村役場の前の駐車場に刈羽村から来たバスが到着した。刈羽村社会福祉協議会の面々と村民合わせて15名が、夜行バスの疲れも見せず降り立った。NVNADも、この日、西宮からのバスを運行した。筆者らは先に野田村に入り、二台のバスを迎えた。双方のバスに、互いに顔見知りのスタッフがいるため、バス間の事前の調整は万全で、すぐに活動が始まった。まず、刈羽村の方々が中心となり、泉沢地区にある仮設住宅で餅つきを行ったのを皮切りに、集会所での交流会、趣味の手芸について技術や作品の交換などが始まった。あれこれと細かく計画されたプログラムなどはおよそ不要であり、刈羽村の住民と野田村の住民は、まるで以前からの知り合いであるかのように会話を交わし、溶け合うような交流を展開する姿が見られた。会場には、西宮、刈羽、野田のリレーであることを示す横断幕も飾られた。

また、新潟県柏崎市の企業から協力を得て持参したお菓子は、五カ所に分散されている仮設住宅の全戸に対し、一軒ずつ手渡しで配布された。どこに行っても、すぐに会話が始まり、時に、野田村の方も刈羽の方も、被災当時を思い出して涙される場面があった。夕方からは、チーム北リアスと泉沢仮設住宅の方々とが一緒に開催してきた月

例交流会と野田中学校仮設住宅で同時開催された交流会に別れて参加し、今度は「新潟の酒と岩手の酒の飲み比べだぁ」などと賑やかに交流が始まった。途中、参加者から歌は出る、思い出話に花が咲く、大いに盛り上がる中、あちらこちらで、被災体験を含む深刻な話が繰り広げられていたことも印象的であった。

この日の活動を通して、刈羽村からのボランティアが、野田村で被災された方々への想いを届けようと、野田村各地で懸命に活動している姿は、多くの人々の胸を打つものであった。参加者からは、「ずっと助けられるばっかで、何とかお返ししてぇのぅと思ってたいやぁ。これでやっとね。おらほんと嬉しいんだよ」、とか、「こうしてここにお返しさせて頂くことが、私たち支援を受けた者の務めだと思います」といった声が寄せられた。

さらに刈羽村からのボランティアが去った後、野田村で話を聞くと、「支えてもらうばかりでは心苦しい」という声が聞こえることがある。また、「何とかお返しをしたい」という相談を受けることもある。そんな時は、「もしまたどこかで災害に遭われて困っている方々がいらっしゃれば、助けて差し上げて下さい」と応じている。

この事例では、1995年に全国からの支援を受けた西宮市から、2007年中越沖地震で被害を受けた刈羽村へと支援がなされ、そして、2011年東日本大震災に際して、刈羽村から岩手県野田村へと支援が展開された。このように、過去の被災地から、現在の被災地へと支援がリレーされているように見えることから、「被災地のリレー」と呼ばれる。

過去に、被災した人々は、災害ボランティアに助けられるばかりだと感じ、何か「負債」をおわされたように感じられる。ただ、お返しをするにも、誰にお返しすれば良いか定かではない。そこで、支援した災害ボランティアではなく、「またどこかで災害に遭われて困っている方々」への支援へとつながって行く。野田村で活き活きと活動していた刈羽の方々の姿には、あたかも「負債」をようやく返したという安堵感があったように思える。こうした「負債」の返還が、被災地のリレーの原動力の一つになっている。

刈羽村からのボランティアは、津波で多くを失った野田村の被災者を理解できると考えて、被災者の苦しみに随伴したサポートを展開したわけではない。むしろ、餅をついて味わい、手芸を楽しみ、お菓子を配り、そして、日本酒の味比べをやりながら、時を共に過ごしたに過ぎない。こうした一見、苦しみや悲しみとは関係のないところでのサポートが、被災者の癒やしに繋がることを願って活動したわけである。被災地のリレーが示唆していることは、こうした特別な共感が伴い、人と人とをより強力に、より深く結びつけるということである。

また、被災地のリレーから見落としてはいけないのは、リレーを開始した側、すなわち、過去の被災地の変化である。上記の事例の中でも、「ずっと助けられるばっかで、何とかお返ししてぇのぅと思ってたいやぁ。これでやっとね。」と語られている。これでやっと、自らの復興への取り組みも一段落するという意味であろう。

4．新しい社会へ

東日本大震災以降の災害ボランティアは、相互扶助の理想の社会の局所性と、泡沫性を乗り越える必要があった。被災地のリレーは、こうした課題を克服できるだろうか？まず、被災地のリレーの局所性から考えてみよう。

社会心理学者ミルグラムは、われわれが、自分とはまったく縁もゆかりもない見知らぬ人であっても、わずか数人の人々を介せば、その人にたどり着けるということを実験的に示した。最近では、さらに研究が進み、たくさんの地域がある場合、ランダムに数カ所の地域を選び、そこに局所的な関係を結ぶことができれば、一挙に全体が繋がる可能性があることが示されている。被災地の

リレーは、まさに、ここでいうランダムな結びつきである。西宮、刈羽、野田とたった３カ所のリレーであっても、そこから、局所性が回避される可能性がある。

次に、被災地のリレーの泡沫性の課題を解決しておこう。事例においても、刈羽の人々は野田村で数日を過ごした後、刈羽に戻る。相互扶助の関係がそれほど長くは継続しないのは事実である。そこで、間歇的な持続という考え方を導入する。すなわち、事例で示した１つのリレーがずっと継続することを考えるのではなく、大規模災害が発生する度ごとに、被災地のリレーが発生するように努めるのである。

そのためには、災害 NPO がより重要な役目を担うことになる。災害 NPO は、被災者と緊密な連絡をとって、災害ボランティアに対し、様々な活動プログラムを準備することを重要な活動としている。過去の被災地との交流を継続している災害 NPO であれば、過去の被災地の人々が、その意向を示した時、被災地のリレーをコーディネートしていくことができる。より具体的には、現場において、何らかの返礼の動きがみられた場合には、次なる被災地での活動があり得ることを伝える。このことが、被災地のリレーの原動力となることは、先に示した通りである。そして、災害が発生すれば、その都度、被災者本位に積極的な活動を展開する。災害 NPO が、こうした視点をもって活動することによって、災害ボランティアの活動が、大規模災害が起こる度に、間歇的ではあれ、被災地のリレーとして連鎖し、社会全体という場で、意外なほど早く、相互扶助の新しい社会が実現していくものと考えたい。